

「私たちの十五歳の頃」

東日本大震災から5年目に入ります。私たちの住む会津地域には双葉郡から多くの人が避難してきました。私たちは、生まれた土地に育ち住んでいます。いま避難している人には、「ふるさと」はまだまだ遠くにあります。

今回、大熊町地域学習応援協議会の事業として、大熊のみなさんの十五歳のころを聞き書きしました。それは、大熊の子どもたちに地域の事、そこに住んできた「思い」を理解して欲しかったからです。

この事業は、会津大学短期大学部の学生と、特定非営利活動法人寺子屋方丈舎のスタッフが聞き書きを行いました。大熊の子どもたち、そして、地域のみなさんの何らかの記録になれば幸いです。

主催…大熊町地域学習応援協議会

2014年(平成26年度)文部科学省

学びを通じた被災地のコミュニティ再生支援事業(委託事業)



語り手
佐々木武朗さん
(77歳・熊町)

今と昔の15歳

私は今回、会津若松市に住む佐々木武朗さんに15歳だった頃の話を聞いた。

武朗さんの実家は農業を行っており、学校から帰ってくると、親から「今日は○○の田んぼに行くから」と言われ、田んぼに行き、暗くなるまで農作業の手伝いをしていた。農作業のほかに、薪を用意して風呂を沸かすなど、家の手伝いも行っていた。そして、それらの作業をしながら、

だ。そのような光景を想像すると、私は逆に何か新鮮なものを感じた。

仲間意識は人一倍強かったという武朗さん。ある日、別のグループのガキ大将が、親友をいじめている場面を偶然見た武朗さんは、いじめられていた親友のために、ガキ大将をやっつけてやろうと呼び出し、ケンカをしたそう。家に帰り、父にケンカをしてきたことを話すと、「ケンカするんだったら死ぬまでやれ!」と言われたという。私は、武朗さんの仲間意識の強さを感じたとともに、武朗さんの父の言葉に対し驚きを感じた。武朗さんは「今の子どもには絆がねえ」と語る。中学生の頃は、ケンカをすれば仲間が集まってきて、一つの軍団をつくり、相手の軍団とケンカをしていたそう。

今では、子どもたちが個人や集団でケンカをする姿を見かけることはない。テレビゲームの進

父が帰宅するのを首を長くして待っていた記憶があると話してくれた。

地域の子どもたちを引き連れて遊んでいた武朗さんは、仲間たちの中では、いわゆるガキ大将のような存在であったそう。面倒見がよく、中でも年下の子たちからはすぐ慕われていたように、遊びの場所に武朗さんが来るのを心待ちにしていたのだとか。秋は田んぼでイナゴを捕ったり、冬は地域の川で魚釣りをしていたという。川にはハヤやカジカがたくさん泳いでいて、よく釣れたらしいが、今はそういった魚はいない。

当時は鉛筆削りなどの便利な物がなく、子どもたちは小刀を使って鉛筆を削っていたそう。『今の子どもたちは、小刀の使い方もわかんねえべ。孫に使わせると(危なっかしくて)見でいらんねえ』という。絆創膏なども無く、怪我をしたときは傷口に手ぬぐいを縛って処置していたそう。

歩や、公園での遊び方に厳しい制限が増えたこともあり、外で遊ぶ子どもも減少している。私自身も中学生の頃は殴り合いのようなケンカをしたことがなく、外遊びよりは、室内で遊ぶ方が中心だった。武朗さんのお話を聞き、ケンカや外遊びをもっとしておくべきであったと感じた。そこでしか得られないものがあると思ったためである。

今回の世代間交流を通して、佐々木武朗さんのお話から武朗さんが15歳だった頃のくらしを知ったことは、自分の視野を広げるきっかけになったと思う。今回の出会いを縁に、大熊のことをもっと知りたいと考えている。



聞き手
阿部基樹さん
(会津大学短期大学部
社会福祉学科2年)

武朗さんが15歳の頃を思い出しながら懐かしそうに話していた姿がとても印象に残りました。貴重なお話が聴けたことは私にとって非常に良い経験になりました。